



産業医科大学 数学教室

当大学は1978年に開学、同年医学部1期生が入学し、翌1979年には医療技術短期大学が開学した。私立であるが、設立および運営の資金は労働省から出ており、自治医科大学と似た性格をもつといわれる。学生定員は一年あたり医学部が100名、短大看護学科60名、同衛生技術学科40名である。

数学担当の教員は医学部1名(松浦孝行)、短大1名(松井清)である。組織上は別であるが、実質的にこの両名が数学研究室の構成員となっており、医学部、短大双方の講義を分担して担当している。数学以外に、松井が非常勤講師として医学部統計学を担当しており、また全国的にみても特色あるといわれる医学部医学概論(総合人間学)では、松井がセミナー「実験の計画と計算機処理」を担当したり、松浦が講義「確率とかけ」のほかフランス文学を学んだ経験等を生かして、セミナー「性と愛」「愛と西欧」「性の時空」、講義「実態としての男女関係」「男女のかかわりとしての性」「虚実の性」などを担当した。

教室員両名とも日本数学会、日本OR学会会員であり、数学会では、松井が代数学分科会、松浦が代数学、応用数学分科会に所属している。専門は松井が代数群の表現論であり、松浦のほうは初等整数論に興味をいだき

ながら雑多なことに手を出している。

最近では、両名とも計算機とのかかわりが多い。学内共用の計算機としてVAX-11があるが、能力的に不足の点があり、その場合、松浦は東大、九大、松井は東大、京大、九大の大型計算機を使用している。

松浦は整数計算が主であるため、計算時間がかかるのがやや悩みとなっている。素数を扱う場合など、ベクトル化がかなり困難であり、東大のスーパーコンピュータS-810を効率的に使うことができない。やむをえずCPUを10時間ずつに区切って、主にスカラでやっている。

松井は最近統計理論およびデータ処理に興味をいっており、計算機を使用しての実際の統計処理の手法を開発したり、パソコンから中大型機へのデータ転送システムをつくりあげたりして、理論および実際の両面で、学内他部門の研究者に助言を与えたり、若手研究者を指導したりしている。

これからの抱負として、松井は「かなり困難ではあるうが、統計学的な問題を本当の意味で数学の中に持ち込んでみたい」と語っている。松浦のほうは、なんでも屋敷に方々に首を突っ込んで学際的な分野にかかわりながら、数論に対する興味もいだきつつけるつもりである。

(松浦孝行)

大阪大学 工学部 応用推計学研究室

本研究室は工学部の共通講座として昭和41年に設立され応用物理学部に所属している。講座名は応用推計学であるが、担当教授として西田が赴任して以来、一貫してORの研究を行なっている。

スタッフの出入りは頻繁な方であり、教授以外は何代も入れ変っている。助教授はすでに3代目であり、初代の児玉氏は現在九州大学経済学部の教授として、2代目の田畑氏は本学の経済学部において活躍中である。現在は石井博昭助教授が精力的に指導に当たっている。助手の定員は2名で現在は大鈿、塩出の両君がそれぞれ信頼性、確率計画法の研究を行なっている。

本講座は共通講座であるがために、講義内容は数学解

析、確率統計など、工学部学生のための基礎的な科目がほとんどであり、OR関係の講義は大学院修士課程で半年間のものが1つあるだけである。したがって、4年次で講座配属された学生に対しては、基礎からOR教育をするという難点がある。しかし、修士課程にそのまま進学する時分にはかなり学力も充実してくるので、修士2年間では少しまとまった研究を行なうことができる。

博士課程には各学年で1名ないし2名の学生がおり、それぞれ別のテーマではあるが、協力して研究に当たっている。また、毎年どこかの大学から内地留学などでこられる方も多く、研究室に活力を与えている。自衛官の研究生も現在はいないが、過去3名を受入れており、それ